愛知教育大学研究報告，59（人文・社会科学編），pp. 71～76, March, 2010

スターンと奴隷制度

久野陽一

外国語教育講座

Sterne and Slavery

Yoichi KUNO

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

ロレンス・スターン（Laurence Sterne）晩年におけるイグネイシアス・サンチョ（Ignatius Sancho）との交友関係は重要なものだった。それは，サンチョが18世紀の在英黒人のなかでも例外的に高い教養と十分な読み書き能力を備えた人物だったからだけではない。両者の交流は，1766年サンチョがスターンに手紙を送ったことから始まる。それに対するスターンの返信も含めて，彼らの文通は，スターンの死後1775年に，娘のリディア（Lydia Médalle）が出版したスターン書簡集（*Letters of the Late Rev. Mr. Sterne*）(1)に収められ，サンチョの知名度を高めた。そして，サンチョの方も死後に二巻本の書簡集『アフリカ人，故イグネイシアス・サンチョ書簡集』（*Letters of the Late Ignatius Sancho, an African*, 1782）を出版することになる。イアン・キャンベル・ロスによると，サンチョの手紙が持っている意義は，『トリストラム・シャンディ』（*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*）に対する評価の変化を示していることにある。すなわち，それは「この小説が道徳的作品だという評判が高まってきたことの証左として，また，この小説で改良を効果的におこなうことができると読者が信じていたことを示すものとして，注目すべき」なのである（Ross349）(2)。ここで重要なのは，スターンの方もサンチョと文通することを通じて，奴隷貿易反対という，1760年代にはまだ運動はクエーカー教徒などに限られ，社会的に盛り上がっていたとは言い難い問題について，公的に反対の立場を表明しようとしたことである。そこで以下，このロスによる評価を踏まえて，書簡や説教集を含めたスターン作品において奴隷の主題がどのように展開されているか，今後の議論のために概略をまとめておきたい。

1．サンチョ書簡

まず，サンチョからスターンへの手紙はどのようなものだったのか。1766年７月21日付けのこの手紙が書かれたとき，両者はまだ知り合いではなかったので，「こうしてお手紙を送るぶしつけのお許しを願っては，あなた様のご慈愛（あるいは，そのように見えるもの）に対する侮辱と取られかねません」（Sancho73）と，手紙の冒頭を書き始めたサンチョは，これに続けて自己紹介をする。「私は，下劣で偏狭な連中が〈黒んぼ〉（“*Negurs*”）と呼ぶ者の一人です。――私の人生の前半はかなり不運で，無知こそが服従させるための最善策だと判断するような家族のもとに置かれておりました。根気よく勤めましたが，少ししか読んだり書いたりはできませんでした。――私の人生の後半は，――神のお恵みにより，まったく幸運なことに，この王国でも最良の家族の一つに仕えて過ごしてまいりました。――書物が私の最上の楽しみでした。――博愛主義（Philanthropy）をもっとも愛しました。――そこで，あなた様の，（数百万人の中でも）私には，あなた様のお作りになった，あの愛すべきトウビー叔父さんにどれほどの恩義があることでしょう！――私は宣言いたしますが，あの正直な伍長と握手できるのなら，酷暑のなか10マイル歩いて行ったってかまいません」（73–74）。ちなみに，サンチョの『書簡集』にはジョゼフ・ジキル（Joseph Jekyll）という人物の書いた「サンチョ伝」（“The Life of Ignatius Sancho”）が付されているが，その内容について大いに疑問の余地があることが，ブリチャン・ケアリーによって指摘されている。それに対して，このスターンへの手紙の自己紹介部分は，サンチョ自身の手による唯一の伝記的記述ということになる（Carey 参照）。

冒頭のこの部分を見て分かるのは，この手紙がスターンへのファンレターのようなものとして書かれていることであり，「博愛主義」の作家としてスターンを持ち上げようとしていることである。ここでサンチョは，トウビー叔父さん（Uncle Toby）やトリム（Corporal Trim）などの名前を挙げて『トリストラム・シャンディ』をその基準で評価しようとしている。さらにサンチョは，「あなた様の説教は，私の心に触れ，それをよりよく作り替えてくださいました。それで私は

要点が分かったのです」(74) と述べて，スターンの説教「人生の短さと困難に関するヨブの弁明」(“Job’s Account of the Shortness and Troubles of Life, Considered”) からの引用（ただし語句に多少の異同あり）をした上で，手紙全体の結論部分にいたる。

この結論部分でサンチョは，次のように，スターンの「パセティックな文体を模倣して」(Ross 349) 奴隷制度批判をおこなってほしいと懇願する。「私の好きな作家のうちで，あなた様と，サー・ジョージ・エリソン（Sir George Ellison）を書いた慈悲深い作者をのぞいて，私の哀れな黒い同胞たち(my miserable black brethren）のために一粒でも涙を流してくれた方は誰一人いらっしゃいません。――あなた様なら私のことをお許しくださるでしょう。――ほんの半時間でも奴隷制度に注意を向けていただくことをお願いしても，あなた様なら私を褒めてくださるでしょう。それは今このときも，西インドでおこなわれているのですから。――このような主題も，あなた様の印象的な手際にかかれば，たくさんの者の――いや，たった一人であっても――くびき（多分）をゆるめさせる（ease the yoke［perhaps］of many）ことになるでしょう。――おお！――慈悲深い心にとって何という饗宴でしょう！（what a feast to a benevolent heart!）――それに，あなた様は慈善行為（acts of charity）においては食通（epicurean）でいらっしゃいますよね。――あまねく読まれ，あまねく称賛されるあなた様なら，――あなた様が失敗なさるはずはございません――何千もの私の同胞の黒人たちが両手を高々と挙げている光景を，私の中にご覧になっていると思ってください。――（あなた様が感傷的［pathetically］に述べておられますように）悲しみとは雄弁なものです。――彼らの姿を思い浮かべてください！――彼らが哀願する声をお聞きください！――ああ！――あなた様が拒絶されるはずありません。――慈愛が応じてくれるはずです。――それを望みつつ，私があなた様にこのように記すことをお許し願います。／敬具／Ｉ・サンチョ」(74)。

ここでサンチョが，ダッシュを多用したスターン風の文体を駆使してアピールしているのは[3]，「彼らの姿を思い浮かべてください」という言葉に代表されるような，感傷主義の持つ共感の仕組みである。同時にサンチョは，「慈悲深い心」にとっての「饗宴」，あるいは「慈善行為」の「食通」などの表現から読み取れる，感傷主義の「博愛」の裏側に潜む快楽原理をも見抜いている。「悲しみとは雄弁」なのである。また，「くびき」という語の直後に挿入される「多分」という言葉からは，サンチョのユーモア感覚だけでなく，彼が西インド諸島における奴隷たちの様子を「多分」と推測せざるを得なかった，すなわち，彼自身は奴隷の実際を体験的に知らなかった可能性が示唆される。サンチョは自分の「人生の前半」が「かなり不運」だったのは，仕えた「家族」が良くなかったからだとは言っているが，自分が奴隷だったからとは一言も述べていない。ケアリーが論じているように，ジキルが書いた伝記を鵜呑みにせず，サンチョには元奴隷という自己認識はなかったと考えると，黒人たちが「両手を高々と挙げている光景」を彼は思い出しているわけではない。それを想像しなければならないのは，サンチョの方も同じなのである。ただしサンチョの場合は，それを「私の中」に見いだすことができるのが，スターンとの大きな違いである。おそらく目撃したことのない，あるいは，そうだとしてもすでに忘却した西インド諸島の奴隷たちを「私の同胞」と呼ぶサンチョの共感の力は，彼のアフリカ系英国人としての自己アイデンティティの重要な部分を形成する。

なお，サンチョがスターンと一緒に言及している『サー・ジョージ・エリソン』の「慈悲深い作者」であるサラ・スコット（Sarah Scott）は，スターンの妻の親類にあたる[4]。

2．スターン書簡

このような黒人のファンからの手紙に対して，スターンはどのような返事を送ったのだろうか。スターンの返信には，リディアが出版した書簡集に収録されたものとスターンの備忘録のレター・ブックに残されたものと二つのバージョンがあって，多少の変更箇所がある。ロスによると，こうした変更は最初からスターンがこの手紙の出版（公表）をもくろんでいたことを示唆する（Ross 350)。以下，ここでは書簡集版を使用する。

スターンからサンチョへの返信は，1766年７月27日付けでヨークのコックスウォルドにある牧師館で書かれた。まずスターンは次のように，ちょうど黒人の娘が登場する『トリストラム・シャンディ』の挿話を執筆中という「不思議な偶然」について語ることから手紙を始めている。「サンチョさん，この世界の小さな出来事には（大きな出来事と同様に）不思議な偶然の一致というものがあるものです。というのは，ちょうど私は，友達もいないかわいそうな黒人の少女の悲しみについて，心を打つ物語（a tender tale）を書いていたところなのです。その少女の多くの兄弟姉妹のためにあなたが書いた手紙が私のところに届いたとき，私の両目はまだずきずき痛んでいるところでした。――それにしても，なぜ彼女の兄弟なのでしょう！――あるいは，サンチョさん，なぜあなたの兄弟なのでしょう！　なぜ私の兄弟ではないのでしょう？　セントジェイムズ［公園］あたりのもっとも白い顔からアフリカのもっとも黒い顔の色まで自然が下っていくというのは，もっとも美しい色合いによる，もっとも無感覚な等級付け（insensible gradations）です。こうした色合いのどこで血の繋がりが終わるというのでしょ

う？　そして，さらに私たちはどれほど多くの影を，尺度の下の方の，神の慈悲もそこで終わってしまうようなところに置かなければならないのでしょう？――それでも，サンチョさん，世界の片方がもう片方を獣のように扱ったり，そうしようと努力したりするなんてことは，けっして珍しいことではありません」（Sterne, *Letters* 285–86）。ここでスターンは，存在の大いなる連鎖の「尺度」に基づいて，肌の色による人種が「等級付け」されることとして差別を考えている。

スターンの想像力は続けて，「西の方角」へ，おそらく大西洋を越えた「西」に向かう。「私はと言えば，（少なくとも物憂げな気分［a pensive mood］のとき）西の方角を見やると，我々の兄弟や姉妹があそこで担いでいる重荷のことを必ず考えます。――そして，彼らの肩の重荷を１オンスでも軽くできるのなら，そのためにメッカへでも巡礼すると，私は宣言します。――ところで，サンチョさん，これはあなたの10マイルを超えますが，博愛の訪問（a Visit of Humanity）としては同じ割合なのです。――あなたがどれほどトウビー叔父さんに負っていると言っても，彼の方があなたに負うところは大きいのです」（286）。ここにある「物憂げな気分」と想像力の組み合わせは感傷主義につきものであろう。ここでスターンは，そうした想像力の媒介としてサンチョを持ち上げているのである。

この手紙は，黒人少女が登場する挿話の意義をさらに次のように述べる。「私が今書いている作品にその物語を織り込むことができるとしたら，それは苦しんでいる人たち（the afflicted）のためです。――そして，それはもっと大きな問題なのです。というのは，深刻な現実において，それは世界に悲しい影を落とすのです。世界の大部分は，暗闇の鎖と悲惨の鎖（Chains of Misery）につながれてきたし，今でもつながれているのです。私にできるのはただ，あなたに敬意を払ってお祝いすることです。あなたはあっぱれな努力によって鎖を引きちぎったのですから。――そして，善良で情け深い家族の手にあなたをゆだねることによって，天はあなたを他から救ってくださったのですから」（286）。スターンは，「鎖を引きちぎった」と，黒人であるサンチョを自動的に元奴隷だと考えているようだが，ここで「鎖」は，奴隷をつなぐ文字通りの鎖だけでなく，人類全体にとっての比喩にもされている。最後に，この手紙は「善良な心（good hearted）のサンチョさん！　さようなら！　あなたからの手紙のことはけっして忘れませんからね」（286）と締めくくられる。

ここでのスターンの議論は，マークマン・エリスが指摘するように，確かに人道主義的に人種差別を否定しているが，それでも肌の色の「等級付け」という言葉に見られるように，依然として人種的差異の言語の残余のある「イデオロギー的なリスク」を負っていることには注意が必要であろう（Ellis 65）。それゆえに，人種の差異を超えた人類の「血の繋がり」という人道主義的センティメンタリストの言説と差異の言説のあいだで，「スターンは居心地悪そうに見える」（Ellis 67）とも言える。

その後スターンは，この手紙で言及している黒人の少女を『トリストラム・シャンディ』第９巻６章で登場させる。ここではこの挿話に進む前に，サンチョの手紙で言及されていたスターンの説教「人生の短さと困難に関するヨブの弁明」について見ておきたい。

３．説教と『センティメンタル・ジャーニー』における奴隷問題

もともと英国国教会の牧師でもあったスターンは，『ヨリック説教集』（*Sermons of Mr. Yorick*）というタイトルで，1760年と1766年に説教集を全部で四巻出版した。言うまでもなく，「ヨリック」とは『トリストラム・シャンディ』に登場する牧師の名前である。その第二巻に収められた「人生の短さと困難に関するヨブの弁明」は，人生の短さ，また人生における苦難についてヨブ記の一節（14：１，２）に対する注解としての説教である。サンチョがスターンへの手紙の中で注目したパッセージは，人類の歴史において見られる，様々な苦悩を列挙している中にある[5]。「考えてみなさい，これまで我々人類のいかに多くが，残酷で気まぐれな暴君（tyrants）に踏みつけにされてきたことか。そうした暴君たちは，彼らの叫びを聞こうともしなかったし，彼らの苦痛を哀れもうともしなかったのです。奴隷制度について考えてみなさい。――それがどんなものか。――それがどれほど苦い体験で，どれほど多くの人たちがそれを味わわねばならなかったかを。――それがもしただ私たちの肉体になされただけで，あらゆるこの世の幸福を完全に損なってしまうものだとしたら，肉体と心，両方の奴隷状態を含む場合，それはどれほどのものでしょう？」（Sterne, *Sermons* 99–100）。

この前後では，人類の歴史上の戦争の苦難，専制的なローマ・カトリック教会などの例が列挙されており，まとめとして「専制的な簒奪」（100）が批判される。この説教は奴隷制度のみを批判しているのではなく，人類の歴史において見られる「この悲しい歴史と人間の苦悩のより公的な原因についての詳細」（100）の例の一つとして，奴隷制度を取り上げているのである。そうすると，ここでスターンが言っている奴隷制度は，同時代の西インド諸島でおこなわれていたそれを必ずしも指してはおらず，問題とされているのは神学的な意味での人類の堕落後（postlapsarian）である。しかし，この説教がサンチョを刺激して手紙を書かせたことから考えると，「奴隷貿易廃止運動の思想を予見していた」（Wehrs 174）とすることもできる。

スターンの説教のこの箇所への注釈においてメルヴィン・ニューは，スターンの同時代における受容のされ方を示す一例として，上記のサンチョの手紙を引用し，それがスターンのレター・ブックに書き写されるにあたって変更された語句の詳細を記述している。また，ニューは『センティメンタル・ジャーニー』（*A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick*）の以下の二つのパッセージに注意を喚起している（New 148–49）。

「好きなようにいくら装いを変えても（disguise），奴隷（slavery）には違いないのだ！　と私はつぶやいた――それはやはり苦杯（a bitter draught）なのであって，古来からいつの時代でも多くの人々が苦杯を飲まされているが，いつだって苦いものなのだ」（Sterne, *A Sentimental Journey*, Florida edition 96; California edition199）。「生まれつき奴隷の身分（slavery）以外に何の遺産もない何百万もの我が同胞のことを考え始めた……」（Florida edition 97; California edition 201）。前者は「パスポート――パリのホテル」（“The Passport: The Hotel at Paris”）から，後者は「捕囚――パリ」（“The Captive: Paris”）からの一節で，それぞれに「奴隷」の語がキーワードである。

ヨリックは，パスポートを持たずにフランスに入国した。そのためいつ捕らえられるか気が気でならない。その不安がパリのホテルで彼の心をとらえて放さない。この不安が，ヨリック（あるいはスターン）のセンティメンタルな共感のメカニズムが働き始める重要な場面を生み出す。ただし，それは「群衆」ではなく，「一人」に対して働く想像力である。後者のパッセージは，引用箇所の後，次のように続く「しかし，その想像図がどんなに悲惨なものであっても，私はそれを身近に考えることができず，ただ群れをなした数多くの哀れな人たちが私の心をかき乱しただけであった」（Florida edition 97; California edition 201）。

カリフォルニア大学版の『センティメンタル・ジャーニー』の注釈においてガードナー・D・スタウトは，「生まれながらに奴隷の身分以外に何の遺産もない何百万もの我が同胞」というフレーズは，サンチョのことを念頭に置いていると指摘しているが（California edition 349），すでに述べたように，サンチョが生まれながらに「奴隷の身分」であった証拠はない。また，説教での場合と同様に，この「奴隷」が黒人の奴隷だけを指している確証はない。

4．『トリストラム・シャンディ』における奴隷問題

スターンの主著『トリストラム・シャンディ』の最終巻にあたる第9巻6章に登場する，スターンがサンチョへの手紙で言及していたと思われる物語は，いわば脱線の脱線である。いよいよトウビー叔父さんがトリム伍長を伴って，ウォドマン夫人（Mrs. Wadman）の家に「出陣」する直前にぐずぐずしているときに，トリムは，自分の兄のトム（Tom）がソーセージ屋の未亡人を誘惑する話を始める。この話に「哀れな黒人の少女」（a poor negro girl）が登場する。「トムがそのソーセージ屋に入りますと，店には誰もおらず，ただ一人哀れな黒人の少女が，長い棒の先に白い羽をつけたもので蠅を追い払っていました――殺そうとしていたわけではありません。――そいつはいい光景（a pretty picture）だ！　トウビー叔父さんは言いました。――その娘はな，トリム，きっと迫害を受けて，慈悲（*mercy*）というものを学んだのだ。――／――その娘は，苦難から学んだだけでなく，生まれつき善良な娘だったのでございます。その友達もいない哀れな娘についての物語には，石のような心でも溶かすような出来事があるのですが，とトリムは言った。それはまたいつか陰鬱な冬の夜，閣下がそんな気分になられたときにでも申し上げましょう。トムのお話の残りもそこですることになりましょう。娘の話は兄の物語の一部でもありますので。――／トリム，なら忘れるでないぞ，トウビー叔父さんは言いました」（Sterne, *Tristram Shandy* 2：747）[6]。

「石のような心でも溶かす」その物語は，結局のところ小説の中で語られることはない。『トリストラム・シャンディ』特有のはぐらかしである。しかし，ここでは作者の意図は別のところにあるようだ。この黒人の少女が手にしている「長い棒の先に白い羽をつけたもの」は「鞭」であり，奴隷制の換喩である。奴隷所有者の鞭と奴隷の関係が，ここでは黒人少女の蠅叩きと蠅に「翻訳」されている（Ellis 70）。

小説ではその後，唐突に黒人の「魂」（soul）の話題に脱線する。「ところで，黒人には魂というものがあるのでしょうか？　（疑わしげに）伍長が尋ねました。／私はそうしたことに精通しているわけではないが，トウビー叔父さんは答えました，神は，お前や私がそうであるように，黒人に魂なしでよいとはなさらないと思う。――／――それでは人の頭の上に人を置くという悲しいことになりますから，伍長は言いました。／そうだ，トウビー叔父さんは言いました。では閣下，なぜ黒人の娘は白人よりも悪い扱いを受けなければならないのでしょう？／正当な理由などないさ，トウビー叔父さんは言いました。――／――伍長は頭を振りながら叫びました，ただ彼女のために立ち上がってくれる者がいないというだけで――／――トリム，その通りだ，トウビー叔父さんは言いました，――だからその娘を守ってやらねばならないのだ。彼女と一緒に彼女の同胞［の黒人］みんなを。今のところ我々［白人］のほうが鞭を握っているのは，戦争において幸運だったからにすぎない――この先はどうなるか，天のみが知るところだ！――それでもどちらの側に鞭

がくるにしても，勇敢な者はな，トリム！　鞭などを無情に使ったりはしないのだ。／――神よ禁じたまえ，伍長が言いました。／アーメン，トウビー叔父さんも，胸に手を当てて応えました」（２：747-48）。

この後，トリムはトムの物語に戻る。「戦争において幸運」であったので支配する白人と支配される黒人とができたとすると，それに対して，上記の黒人少女が持っていた「鞭」はその関係を象徴的に逆転させる。このように，何気ない一節にスターン特有の複雑な記号操作が隠されているのである。また，「アーメン」と結ばれるところには，説教のニュアンスがある。フロリダ大学版の注釈によると，第９巻の最初の章は1766年８月12日に執筆開始されたが，その後の章を引きつづき書かれたとは思われないので，スターンがサンチョへの手紙で言っていた「心を打つ物語」を小説に織り込んだかどうか，つまり，このパッセージが断片またはその話の全体かどうかは不明である（New *et al* 532）。

『トリストラム・シャンディ』には，このパッセージ以外にも奴隷制度への態度を示している箇所がある。第４巻32章のその箇所は，興味深いことに，イグネイシアス・サンチョの命名の元になった『ドン・キホーテ』（*Don Quixote*）のサンチョ・パンサ（Sancho Panza）に言及している。そこでは，語り手トリストラムがこう語る。「もし私が自分の統治する王国を選ぶことを許されるとしたら，サンチョ・パンサのように，海に囲まれた国は選びませんし――また，小銭が稼げるような黒人の王国（a kingdom of blacks to make a penny of）も選びません――いえいえ，私は心から笑える臣民の王国（a kingdom of hearty laughing subjects）を選びましょう」（Sterne, *Tristram Shandy* １：402）。フロリダ大学版の注釈も指摘しているように，トリストラムが語るこの一節が典拠としているのは，『ドン・キホーテ』前篇第29章において，サンチョ・パンサが，もし自分の主人（ドン・キホーテ）が黒人の国を領土にすると，統治する人民はみんな黒人ということになるので，その場合は，黒人をたくさん船に詰め込んでスペインへ行き，彼らを売り払ってお金を得ようと決心する場面である。同注釈は，後のスターンとイグネイシアス・サンチョの交流を考えると，ここでサンチョ・パンサの姿勢がトリストラムの姿勢と著しく異なっていることに注意を喚起している（New *et al* 334-35）。

この箇所の直前でトリストラムは「真のシャンディ精神」（True *Shandeism*）について，それは「皆さん方がたとえ何とお心の中で悪く思っておられようとも，人間の心と肺臓を押し開くもの，そしてこの精神と質を同じくするすべての情愛（affections）と同じように，人間の肉体に宿る血液その他の生命に関係ある液体とかを，その正常な進路に惜しみなく送り込むもの，そして生命の車を長く快活に回転させ続けるものなのですから」（Sterne, *Tristram Shandy* １：401）と述べている。血液循環説と感受性のテーマにはここでは深入りしないが，トリストラムが想像する奴隷貿易を排した「心から笑える」王国とは，「真のシャンディ精神」と結びつく，スターンの博愛主義の代名詞としてふさわしいものだと言えよう。

以上，ここまでスターンの作品中に見られる奴隷制度に関する言及を追ってきた。これらの材料をどのように1780年代以降の奴隷貿易廃止運動における議論と接続できるのかが今後の課題となる。

注

(1) 原題は以下の通り。*Letters of the Late Rev. Mr. Laurence Sterne, to his most intimate friends, with a Fragment in the Manner of Rabelais, to which are prefix'd, Memoirs of his Life and Family. Written by Himself. And published by his Daughter, Mrs. Medalle.*

(2) ちなみに，アーサー・H・キャッシュによるスターン伝においては，サンチョからの手紙とスターンの反応が簡単に紹介されているのみ（Cash 253-55）。

(3) スターンからの影響をはじめとするサンチョの文学性については，Sandhu の論考を参照。

(4) この小説については，拙論「奴隷と不愉快の感受性――サラ・スコット『サー・ジョージ・エリソン』――」仙葉豊・能口盾彦・千井洋一編『未分化の母体――十八世紀英文学論集――』（英宝社，2007）40-58を参照。

(5) この説教は“Slavery”の見出しでスターン作品からの抜粋アンソロジー *The Beauties of Sterne*（1782）に収録された（Ross 351）。

(6) 以下『トリストラム・シャンディ』からの引用は，朱牟田夏雄訳を部分的に変更して使用する。

引用文献

Carey, Brycchan. "'The extraordinary Negro': Ignatius Sancho, Joseph Jekyll, and the Problem of Biography." *British Journal for Eighteenth-Century Studies* 26 (2003): 1-13.

Cash, Arthur H. *Laurence Sterne: The Later Years*. London: Routledge, 1992.

Ellis, Markman. *The Politics of Sensibility: Race, Gender and the Commerce in the Sentimental Novel*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

New, Melvyn. *The Sermons of Laurence Sterne: The Notes*. The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne. 5. UP of Florida, 1996.

New, Melvyn, Richard A. Davies, and W. G. Day. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman: The Notes*. The Frolida Edition of the Works of Laurence Sterne. 3. Gainsville: UP of Florida, 1984.

Ross, Ian Campbell. *Laurence Sterne: A Life*. Oxford: Oxford UP, 2001.

Sancho, Ignatius. *Letters of the Late Ignatius Sancho, an African*. Ed. Vincent Carretta. New York: Penguin, 1998.

Sandhu, Sukhdev. "Ignatius Sancho: An African Man of Letters." *Ignatius Sancho: An African Man of Letters*. London: National Portrait Gallery, 1997. 45-73.

---. "Sterne and the 'Coal-Black Jolly African.'" *The Shandean* 12 (2001): 9–21.

Sterne, Laurence. *Letters of Laurence Sterne*. 1935. Ed. Lewis Perry Curtis. Oxford: Clarendon, 1965.

---. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman: The Text.* Eds. Melvyn New and Joan New. The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne. 1–2. Gainsville: UP of Florida, 1978.

---. *A Sentimental Journey through France and Italy and Continuation of the Bramine's Journal: The Text and Notes.* Eds. Melvyn New and W. G. Day. The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne. 6. Gainsville: UP of Florida, 2002.

---. *A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick.* Ed. Gardner D. Stout, Jr. Berkeley: U of California P, 1967.

---. *The Sermons of Laurence Sterne: The Text.* Ed. Melvyn New. The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne. 4. UP of Florida, 1996.

Wehrs, Donald R. "Postcolonial Sterne." *The Cambridge Companion to Laurence Sterne.* Ed. Thomas Keymer. Cambridge: Cambridge UP, 2009. 174–89.

(2009年 9 月17日受理)